

中
勘
助

漱
石
先
生
と
私

漱石先生と私

私が一高の一年の時、今からもう十四五年もまえのことである。これまでの英語の先生が辞職してかわりの先生がくることになった。そのうち誰がどこでききだしてきたのか、今度の先生は生徒をいじめる点では今迄の先生より一枚上だそうだというような噂がたった。今迄いいかげん弱っていた皆はこれをきいて大抵たいてい気を腐らしてしまったであろう。いつも教室では殆んど誰とも口をきかず黙りかえっていた私は、はたでその話を小耳には

さんで怖氣おじけをふるってしまった。愈いよこよその先生に見参の
日ひがきた。それが夏目先生であつた。私は畏かしこまってかた
ずを呑みながら、どんな人だろうという好奇心と前の噂
が生んだかなりな恐怖をもつて、新來の先生を迎えたに
ちがいない。その時何より先に気がついたのは、髭や髪
の毛がはいからに捲きあげてあることであつたというこ
とを覚えてゐる。教科書は前からのひき続きでじよんそ
んのらせらすであつた。先生が新にはじまる章の最初の
言葉を読みはじめた時のその特色のある発音を忘れはし
ない。それは所謂いわゆる恐ろしく氣取つた……それだけ正確な

……発音のしかたで、少し鼻へぬける金色がかった金属性の声であつた。初対面の犬のように五官の神経を極度にまで緊張させていた私はその鶴の一声をきいて、常に先生という優勝者に虐げられている生徒という劣弱な動物の敏感を以て、はやくもこの新来者の何者なるかを直覚して、こいつはたまらないぞ、いじめられるぞ、というように頗^{すこぶ}る警戒心を加えた。先生は人の噂と私の先見にたがわずいい加減いじめはしたが、ちつとも毒氣のないやり方なので生徒に不快を与えるようなことは少しもなかつた。間もなく試験がきた。先生の試験のはじま

るじきまえに同級生の一人が多分私の室へきて……私は寮にいたので……先生は単語を出してその反対の意味の言葉をかけなぞという問題を出すかもしれないといった。それは先生が平生よくそんな質問をすることと先生の授業日数が少いので問題の出しように困るだろうということから思いついたあてずっぽうではあるが、かなり根拠のある説であった。そして私よりもよっぽど忠実でもあり、たんねんでもあったその人は、先生が授業中にちよいちよいきいたり教えたりした単語を一々書きとめてもっていた。私は急に狼狽ろうばいして、その場でそれにひと

通り目をとおさせてもらって試験場へ出た。果してそういう問題が出た。まあよかったと思った。先生は一生懸命答案を捏造ねつぞうしている生徒の机の間をまわりはじめた。単語で弱ってる者があるらしい。前の方で先生はある一人の書いている答案を見ながら、

「こんな字はありませんよ。お直しなさい。」といったようなことをいっている。私は面白い先生だと思った。と同時にかなりな恐慌を起した。それはそうして注意してくれることは誠に有り難いけれど、私がもしそういわれたらどうしよう。もともとうろ覚えなんだからちつと

も自信がない。直せといわれたってそれが出来るだけの智慧はありはしない。先生は机の行に沿うてとうとう私のところまでやってきた。立ちどまってじっとみている。私は小さくなって心に無事を祈っていた。先生は黙って通りすぎた。私はほっとした。しめた、当ってたなと思った。

猫が評判になったのは私達が先生の手からはなれた二年か三年の時であった。世間で評判なとおりの寮内でも非常な評判で、私の室にも誰が買ったのか借りたのか、猫の載っているほど、ぎすがおいてあった。併しかしその頃の

私は詩歌ばかりを愛読して散文というものは見向きもしなかつたのみならず、寮の室内では教室とはうってかわつた饒舌家、諧謔家……であつたにかかわらず、作物のうえの諧謔滑稽に対しては嫌悪をさえもつていたので、「吾輩は猫である」はその表題からして私の顔をそむけさせるに十分であつた。その後私が大学へは行って、猫などはもうよほど古くなってからやつとはじめて猫を手にとつてみたが、はじめの百頁内外で厭あきてやめてしまったきり、いまだにその先を知らない。やはり寮の室で人にすすめられて「まぼろしの楯」を読みかけたこと

があつたが、なんでも最初の書き出しに不快を感じてやめてしまった。「遠き世の物語である。パコンと名乗るものの城を構え濠を環めぐらして人を屠ほふり天に驕おごれる昔に帰れ。今代の話ではない。」これである。今でも気に入らないことは同じである。昔ほど強い反感をもたないだけのこと。

記念祭のまえには校門から寮へかけて様々な広告(?)のびらが貼られる。「南寮六番歓迎」といったような無能なのから、一世一代の智慧をしぼったかと思われる念入りの、しかもなかなか上手なのにあたるまで。猫が評

判になってからはそれにちなんだのが沢山あった。中に一つ、それはどういう意味であつたかなかつたか、ぴんと鬚を張つた猫が……多分先生に似せてかいたのだろう……容体ようたいぶつてる下にいろんな獣が集つているようなところをかいた絵があつた。私は通りがかりに例の猫だなと思つて何気なく見ていたが、ふと気がついたら先生が教員室のほうからこちらへくるところなので、私はすたすたと歩きだした。そしてふり返つてみたら先生はそのびらの前へ立って、おんなじように鬚をはねあげてふふんといつたような、併し軽蔑でも皮肉でもない面白そう

なおかしそうな笑い顔をして眺めていた。

大学の英文科へはいつてからは始終先生の授業をうけるようになった。久しぶりではあるし、ことに前にはほんの少しの間だったので殆んどはじめてといてもよいほどの気持であつた。それで大体は前から知つてるとおりの先生に相違なかつたけれど、こまか細い点では色々新規に見つけだし、氣のついたところもあつた。先生は身体の小さいに似合わない、わるく底力のあるかなり大きな声で講義をした。先生は講義中に今まで知らなかつた奇癖を数々見せた。片っぽうの口もとをへんてこにね振じあ

げたり、へんに首をくねくねやって草稿を見たり、下唇を口の中へ曲げ込んで口をあきながら天井を見あげていたり、何かいいながら机の上に白く積っている埃ほこりを人さし指の先へ二度も三度もくつつけてみたり、むちやくちやに顔をしかめて頭をかいたあとで、指を鼻先へもつてって丁度犬が非常な臭いものをかいた時のように、鼻を噴かないばかりに鼻の上へ皺しわをよせてみたり……よく皆をくすくす笑わせることがあった。そんな時に先生は気がついて一緒に笑いだすこともあったし、真面目な顔で講義を続けることもあった。先生の講義は十八世紀の

英文学の評論とて、んべすとであつた。前者の最初の部分は評論をする時の態度というようなことであつた。私は筆記の必要を感じなかつたので、しばしば屢先生のすぐ前に席を占めながらついでペンをとつたことがなかつた。先生は一寸それを気にするようになつた。そしてとうとう私と名ざしてはいわなかつたが、「書かなくちやいけない。」という意味のことをいつた。併し私は必要も義務もないと思つたので、その部分のすむまでかなり長い間全くペンをとらずにしまつた。それがすむと、次には本論に入る前に背景として当時の英国の社会の状態か何かの話が

あつた。其頃もまだ詩歌にのみ没頭して他を顧みなかつた私は、最も散文的な十八世紀文学のそのまた背景としての散文的な社会の状態なぞにはいささか些いささかの興味も必要も感じなかつたので、一時間のうちにわずか僅三行五行の心覚えをするばかりであつた。間もなく私はこの私にとっては unnecessary 講義に見切りをつけて、愈本論に入るまで欠席してしまつた。本論に入つてからも私を喜ばせるような作家が一向出て来ないので、かなり大儀な講義だつたけれど、ともあれ多少の興味と必要を感じて筆記をしはじめた。先生は合版の西洋紙の草稿を一枚ずつとりあげて

みながら、ねつつりねつつりと捏でっちあげてゆく。調子が調子なり題材が題材なり、その上そのまた草稿が何でも一行の罫けいの中へ小さな字で二行に書いてある様子で、それが一時間に一頁半か二頁位の割合(?)で進んでゆく。それは退屈な時には一層堪えがたいもので、せめて草稿の頁でもはやくかわってくれればと思わせた。私は高等学校時代から或種の講義をきく時の私の癖として、他人のように先生の顔を見あげたり、ううとの上にかがんだりししずに、窓をとおして向うの空や青葉なぞを見るときもななくじつと見つめながらきいていた。これは私にとってい

ちばん楽な愉快な姿勢、しかたであり且かつ講義をよく呑みこむ上からも必要であつた。そんなこととは知らない先生は私が何に見とれているのかと疑うように一寸ふりむいて窓の外を見たことがあつた。それから後ある時先生は「外のほうを見て講義をきいていないのかと思うときいている人がある。」といつたようなことをいつた。先生はこういう風ないい意味の、或は悪い意味のさらにないあてっこすりを時々私にいつた。それから私は一層遠慮なくそういう風にした。なぜならばそれが先生に気に入るといらないとはさておいて、兎も角私が講義を聴い

ているということとは先生に分ってるのだと思ったから。私はそうしながら先生の説の腑ふに落ちないこと、了解しかねることがあると殆んど無意識に一寸首をかしげた。そんな時に先生はきつと弁明をつけ加えたり……先生はよく「ちよつとおかしいようですが。」といった。……同じ言葉をくり返してくれたりした。……先生はよく「分りませんか。」といった。私ははじめそれが多分私のためであるとは知らなかったが、あまり自分に都合のいい時にそういうことがあるので、ふと気がついて試みにわざと首をまげてみたりした。そして幾回かの試験の後先

生は平気で講義してするようにみえながら学生の一人が一寸首をかしげるのにさえよく気がつくのだということを確認めた。その時分には私は前とちがってかなり後ろの方へ席をしめる習慣になっていたにかかわらず。同様に先生は私が先生の引証する英文の中に出てくる言葉の綴りがわからないでつかえていると、必ず綴りをいってくれた。そして一度なぞは、「この位の字を知らなくちやいけませんよ。」なぞといった。私はいいい先生だと思った。

シエークスピア

沙翁の方は私が英文科に籍をおいている間にてんぺすと、おせろ、まあちやんと、おぶ、ぐえにすと進ん

でいった。この方の講義は文学評論とはよほど調子がちがって、面白味、おかし味沢山のものではあった。私がつ、んぺすとやおせろには少し不都合な調子だと思って最初のうち多少の不満をさえ抱いたくらいに。先生のこの寧^{むし}ろ冷い批評的な態度は其頃すいんばあんのあたらんたをやっていた上田敏先生のといい対照であつた。先生ははしやいで(?) 気儘^{きまま}に諧謔を弄した。私は先生の訳の自在なこと語彙の豊富なことに感心もし羨しくも思った。

先生は講義の間によく誰それがねといったような調子で人の噂、人のいった自分の噂なぞを世間話のように話

した。ある他の先生が先生になんでも人間は植物のよう
に生きてゆけばいんだとかいう説があるといつて、

「君なんぞもその方だろう。」といつたという話をした
ことがあつた。そして先生は、

「人を馬鹿にしてる。」といつておかしそうに笑つた。
植物になるのがあんまり嫌いやでもなさそうに。また別の先
生が猫を評して自分はその中の人物や事件を知ってるか
ら面白いが、そうでない人にはさほどでないだろうとい
うようなことをいつたという話をして、

「そんなんじゃない。」といつた。また遠方の知らない

人がそっくり猫のまねをして書いたものを送ってよこしたといった。そして「なるほどよくまねてあつたが、そんなことしたつてつまらないじゃありませんか。」というようなことをいった。先生は独創がなくてはいけないということ度を度々いった。こういったような挿話や批評や思いつきや冗談やは私が記憶してるだけでも少くはない。

先生はなにか人を笑わすようなことをいった時、自分でもおかしさを噛み殺すように歯を出さずに、下唇をかむようにして梅干をこしらえて、罪のない笑を含んだ凹

んだ感じのする眼でじっと学生の顔を見つめることがあった。そして学生がそれに誘われて笑い出すと、一緒になつて笑つた。先生の笑い顔は不機嫌な時の無愛想にひきかえて可愛らしい顔だつた。ぎっしりと押し合つて全体が少し前へ押し出されたような感じを与える歯を出して、口の中へ何か頬張つてるように笑い声の大部分を鼻から排出する笑い方であつた。先生は随分身のまわりに気をつけるらしかつたけれど、その割に風采はあがらなかつた。洋服の時にも和服の時にも。先生は背が低くて身体の貧弱な割に顔が大きくてひねっていた。そして額の

広い割合に顎あごが短かかった。皮膚が黄色くて弾力を欠いていた。そしてあまり目にたたぬほどのうすい菊石あばたがあった。……併し顔だけとってみればそれは真面目な、智的な、そういう意味での立派な顔であった。こう書いてきて私は昔先生が文科大学の廻り梯子をあがって、廊下を、あの二階のまん中の何番とかいう教室へ、鳥打帽を被って少し弾力的に急ぎ足に歩いてきたその様子を思い出す。そして或日いい加減降る雨の中をその頃あった仮正門の前で駈けよる俣夫をしりぞけて、外套の襟を立てて洋傘をさささずに千駄木の家へ帰っていった先生の姿

を。

学年の終に学科修了の証明をしてもらう時に、私は皆と一緒にごたごたと先生の机のところへ行つて、聴講簿に署名をしてもらつた。私が聴講簿を出した時に先生はその表紙にかいてある私の姓名を見て、

「中君ですか。」といいながら夏の字を花押かおうにしたようなものを無造作に鉛筆で書いてくれた。その後先生は大學をやめ私は国文科へ転科したので、先生と私とは全く縁故がなくなつてしまつた。私が「鶉籠」を読んだのはこの前後のことであつたらうか。就中なかんずく「草枕」を非常

に面白く読んだ。そしてなんでもその文章、ことに語彙の豊富な点に最も心をひかれたように記憶しているが、併し先生が常に、若^もしくは屢^{しばしば}、耳を無視することに対してはいつも不満であつた。先生は確に耳を無視してゐた。と同時に一つには、先生の折々の言葉と先生を最^{もつとも}よく知つてる者の評から考えても、一つには先生自身あまりいい耳をもっていなかつたのだらうと思う。先生が朝日に小説をかきはじめてから私は時々気まぐれに拾い読みするほかには、全く先生のものであることがない近頃は別として、これまでも、私にとって詩歌は殆んど

唯一のもので散文はよほど詩的なものでないかぎりあまり読む気にならなかつたから。

その時分から私の友人の中の二三の者は度々先生のところへ行くようになった。それで自然友人との話の中に先生の噂がくり返されるようになって、いつとはなしに私は先生と大分心安くなったような気がしていた。私は何という訳もなしに友人をとおして先生に、自分が持っている安物ではあるが巧く出来ている可愛い坊主つくりの裸人形を贈ったことがあった。それは先生のところで要領を得ていると行って評判がよかつたということ、そ

して先生がそれをどこかにおいているというようなことをきいた。このほかに友人をとおして私のところから先生のほうへ何か通したものがあるとすれば、それは私が元気にまかせて随分勝手に無遠慮に併し私一個にとって**偽り**^{いつわ}も間違いもなく先生の作物に対して放った罵倒であつたであらう。

私は大学を卒業した年の秋から翌年の春へかけて半年ほどの間病床にいた。挙句^{あげく}、夏になつて病後の保養の為に小田原にある親戚の別荘へ幾月か厄介になつていた。その間に先生の最初の胃潰瘍が起つた。私は電報で修善

寺へ御見舞を出した。その晩だつたらう、夜なかに地曳網の曳手を呼び集める呼手の法螺貝ほらがいのような声に呼びさまされて、先生はどうかしらと思ひながら松山を越えて海岸へ降りてみた。月がこうこうと照っていた。冷い浜に幾人かの曳手が時をおいてえんえんと小さな声をかけながら、少しはなれて見ている私の眼には只影法師ただがゆれているように網を曳きあげた。折角せつかくひきあげた網には魚が一匹もいなかった。一人二人失望の声をあげたばかりで物をいうものもない彼らをあとに、私は伊豆のほうの山を見ながらまた松山を越えて家へ帰った。幾日かの

のち私は先生がよほどいいということを知って、野暮ではあるが美しく彩色した蝶形の麦藁細工むぎわらざいくの籠かごにいろんな色紙や千代紙でこしらえた折物やちりちりなぞを入れて先生のところへ送った。小宮の代筆かなにかで手紙がきた。鷺さぎ、福良雀ふくらすずめなぞと目録を読みながら先生の枕もとへ列ならべるところかなにか書いてあった。先生はそれを見て「この中に中のこしらえたのは一つ二つしかないんだろう。」というようなことをいったという。まったく私の造ったのは蓮花と鶴だけだったかもしれない。今でもそれっきりしか折り方をしらないから。その翌々年の夏

私は信州の湖畔へ行つて「銀の匙」を書きあげた。これは先年病床で書いておいたものに手を入れたので、その夏福岡で死んだ妹の病床のそばで少し書きかけていたかと思う。私がある湖畔から出した絵葉書に対する返事にあつたか、「どうしてそんな寒い処へ行きましたか。早くお帰りなさい。」というようなことが、書いてあつた。それからその時かまた別の時か、私が見て下さいと願っておきながら原稿を送ることのあまり延引するのを申訳したのに対して、いつ迄と約束した訳ではないからそんなに義理がたくして無理をしないようにというよう

なことが書いてあった。とにかく私はそこで「銀の匙」を書きあげて、一里あまりはなれた隣村の郵便局から先生のところへ送った。私は十月の半頃なかば帰京した。そして先生の都合をききあわしたら、原稿はまだ見てないが遊びにならくるがいいというようなことであった。私をはじめて先生のところへ行った時のつれはたしか安倍だったかと思う。私はその日先生のところへ行くつもりもな**く**ぶらりと安倍のところへいったら、これから一緒に行こうということになって、かなりみっともない着流しのままで出かけた。先生は多分午睡中であった。暫く茶の間の

方で待ったのち、安倍の後ろから先生はどんなになつたかしらと思ひながら怖々こわごわはいつていつたら、先生ははじめての者には一寸珍奇な感じを与えるあの和洋折衷のがらんとした座敷に寝起きのすこぶ頗る無愛想な顔をしてちよこんと坐っていた。私はちらりと一目見て、先生が大変な白髪になつたことと、顔がなんだかひどくいかつくとんがった感じを与えるようになったことに気がついた。先生は一寸号令をかけるような具合に指で指図をして、並べて敷いてある座蒲団のうえに二人を坐らせた。先生は私をぐるりと一わたり見まわして、私の汚いみなりに

注意するようであつたがしずかに、

「中君はちつともかわらないね。」というようなことを
いった。れの口をあんまり動かさない無性ぶしようらしいい
方で。私は畏りつつもやっぱり先生をぐるりと一つ見ま
わした。そして先生の顔のいかつくなつたのは髭を刈込
んだせいだと思つた。先生は前掛をしめていた。これは
私の予想しなかつたことであつた。私が先生のそばにあ
る薬瓶に目をつけて何かいつた時、先生はちよつと瓶の
頭をもつて、「なにこりや始終なんだよ。」というよう
なことをいつた。その時にはさっきの寝起きのむずかし

い顔が大分和やわらいでいた。私が先生の白髪になったことをいった時に先生はそれが病気の後からだといった。先生は「いつか君がくれた蝶々の箱がまだとつてあるよ。」といいながら、ふりかえつてそのとつてあるところを見るような風をした。……この日私はあらたまつた時にする私の癖で首を少し左へかしげるようにして、左の眼で余計先生の顔を見るような姿勢をとりながら、じつと先生の眼を見つめて話したりきいたりした。私は大学以来そのままの色々な先生の癖を見出して、久しぶりだという感じがした。

その次の時のつれは野上だった。私がいताずらな心から……先生が此前眼をつけたので……わざとこの前の時と同じ見すぼらしい^{あわせ}袷あわせに袷羽織を着ていったことから考えると、それは最初はじめの時からあまり日数のたたないうちのことであったにちがいない。私たちよりも先に一人お客さんがあつて書斎のほうに坐っていた。先生は机に向つて何か原稿らしいものを読んでいた。私はその人が何かの原稿をもつてきて、先生に見てもらっているのだと思つた。私たちは隣の客間の方へ通されて待つていた。暫しばらくして先生はそれを読み終つて、お客さんと一緒に客

間の方へきた。挨拶がすんですぐであったか何か、二言三言いった後であったか、先生はやや唐突に「ありやいいよ。」と例の口を動かさないいい方でいった。先生は私が今日来ることを予報しておいたので、まだ読みきつてなかった私の原稿をお客様を待たせておいて丁度今読み終わったのであった。私は心のうちで恐縮した。先生は予想外に「銀の匙」をほめた。落ちついた書き方だといった。大変口調がいいといった。私は文章が時に稚氣を帯びてやしまいかと思うといったら、先生は寧ろその反対を考えてるらしい口吻くちぶりをもらした。先生はまた正直に

書いてあると行ってそのあとで、「ああいう意気地のないことを……」といいかけたが遠慮するような風にしてちよつと言葉をきつた。なにか意気地のないということが非常な悪いことでもあるかのようになり、そして私がそんな子供であつたことを赤面でもするかのようになり。先生はこうした私をよく知らない為の勘違いから、その後も話の間にそんなつまらないことについて時々深切な遠慮をしてくれたように思う。先生が私の文章に源氏物語のようなどころがあるというようなことをいったのには、少し非難の意味があつたかと思う。それから原稿が汚く

て読みにくいこと、誤字の多いこと、仮名を「めちやめちや」に沢山使うことを非難した。それは事実であつた。仮名を多く使うことについては、一つは私の或主義から一つは漢字に好悪があるので嫌な漢字を出来るだけ使わない為にそうするのであつたが、私はその時格別そんな弁明はしなかつた。併し先生はいつか友人からでもその理由をきいたのであるうか、その後「銀の匙」の後篇に私は全く遠慮なしに仮名を用いたけれど先生はなんともいわなかつた。私はそれをそんなたいした訳もない単なる他人の好悪のようなものさえ出来るだけ尊重すると

いう先生の寛容、深切からであると解している。先生はまた「銀の匙」を平面的だといって、廻り燈籠みたいにいろんな事件人物が出てくる間に自然に主人公の性格……といったろう……が別わかるようになってるんだねというようなことをいった。先生が「ありやいいよ。」をもう一遍くり返した時に私はすかさず、「よければまだ先があります。」といった。先生はちよつとたじたじとした様子で、「もう沢山だ。」といった。がすぐにもり返して反対に攻勢をとって、「中々面の皮が厚いな。」といった。皆が笑った。私も一緒に。先生は「銀の匙」の

中に出てくる小学校の先生が主人公に向っていった言葉を覚えていて、さっそくのきてんに用いたのであった。先生はこんな言葉戦の駈引は手に入ったものであった。先生は自分のかいた絵を出して見せた。頗る朦朧もうろうとした墨絵だったように思う。私はその下の方に白く丸っこくて細長い頭のついたものを徳利かしらと思つて見ていた。そして何か俳句にでもあるんだらうと思つて。意外にもそれは鶯鳥か何かだった。そしてよく見ればなる程そうだった。先生の画は字よりもよっぽど下手だった。私の知ってる限りでは。それから寺田さんの発議で……

お客さんは寺田さんであつた……その時読売新聞社かに開かれていたふゆうざん会へ行つた。洋服をきた寺田さんと先生は先に、和服の私たちはとかく後にはなれがちに。この日私は博多で買つてきた安物の円錐形の水入れを先生にあげるつもりで袂たもとへ入れていたのだけれど、とうとうそれを出す機会を失つてしまつて後で安倍にやつた。ふゆうざん会から池の端の何かの博覧会へ行つた。博覧会を出た時だつたか、先生は耳のとんがった黄色っぽい大きな犬が人にひかれてくるのをみて、「強そうだな。」といつた。私はその後上野へ住むようになってか

ら度々この犬に出遇つて、よくその日のことを思出した。

多分その翌春私は原稿のことで一人で先生のところへ行つた。先生は銭湯に出かけるところだった。先生のいうままに私は上つて待つていた。この日は書齋の方へ通された。小さな人が出てきて何かいたずらをしながら私と話していた。先生は帰つてきて小さな人を見て笑いながら、「お前がお相手をしていたのか。」と聞いた。先生は気分がよさそうに見えた。そして小さな人いろいろな冗談をいった。「貴様は乱倫不逞らんりんふていの徒だぞ。」なぞと
いって何のことだが別わかるかという。小さな人は芋虫みた

いに身体をくねくねしながらつまらなそうに、「わーかーらーなーい。」という。先生はおかしそうに歯を出して笑った。先生は小さい人を茶の間の方へかえして、原稿について話しはじめた。「銀の匙」は先生の推薦によって朝日に載ることになった。先生は作物に対する批評以外に私の便宜の為に色々注意もし心配もしてくれた。その時であったか、私は私が先生の面会日でない日にはかりくることがすまないという気がするといったら、先生は「でも君は人にあうのが嫌なんだろう。」と行って、「忙しい時は困るが……大抵午前中に（？）小説を書い

てしまうから……。」というようなことで、結局うやむやに許されてしまった。私はその後とても面会日に行つたのは私が先生と話した最後であつたその晩よりほかにはなかつたであらう。私は何かの話から、人間というものが死ねばなくなつてしまふと別わかつてるものなら私はいつでも死にますというようにことをいったら、先生は一寸驚いた様子で、「そうかね。」といつたが、半分冗談のようによ、「そりや無論なくなつちまうんだよ。」といつて、自分だつて死ぬのは何でもないが、手続きが面倒だから死なないというようにことをいつた。これも半ば冗談で

はあったが、私はそれをきいて手続きの面倒がなかったとしても先生はそう無造作に死ぬそうもないと思った。私が実は「銀の匙」は自分にはそれほど気に入っていないといった時に先生は意外らしい顔をして、「じゃあどういふのが気に入るのかね。」というようにことをいった。私はこれ迄書いたものの中では、いつぞやの「島の日記」が一番気に入っているということを書いて、もしそれがいつか活字になったら見て下さいといった。私は最初安倍と先生を訪ねた時であったか、湖の中の小島に舟もなしに一人きりで暮していた話をした。その時も先

生は一寸驚いた……というよりはあきれたのかもしれない……らしい顔をした。夕食の時がきた。私が帰ろうとするのを先生は飯を食べて行かないかと二三度とめるようにしたけれど、私は帰った。「銀の匙」は先生の小説がすんでから先約の晶子氏のが出てその後に載せられる筈だったのを、晶子氏の都合で私のが先になることになり、それが先生の病気のため急に先生の小説の中止される後へすぐ出ることになった。私は友人から先生が病床で「銀の匙」を読んでいるということ、仮名を少くしたという私の言葉に対して、あんまり少くもなっていない

という意味のことをいっているということを書いた。その後私は久しい間先生のところへ行かなかったように思う。その間に私は友人から先生が先生の前で人々のいう「銀の匙」に対する非難に対して一人で弁護しているということを書いた。そしてひよつとすると先生は私自身があるよりも「銀の匙」が好きなのかもしれناと思うた。

いつであったか先生は「銀の匙」を評して、「ああいうのはせんちめんたるっていうんじゃない。」といった。私は誰かがそういって非難したんだらうと思いがらき

いていた。また先生は「銀の匙」を本にして出したらどうかというように、なにか出すすぎたことでも、いろいろな遠慮深く躊躇しながら自分が序文を書いてもいいといった。私は一冊にするにはあまり少いといったら先生は「夢の日記」を一緒にしたら……いやならしかたがないけれど……というようなことをいった。先生は私が前にある雑誌にかいた「夢の日記」を読んで、そして私がそれをいやがっていたことを知っていたのである。併し両方あわせても量が足りないのです、本にすることは沙汰さたやみになった。私はどういう訳でか遊びという

ことについて先生と話したことが幾度かあった。多分私
が謡や碁……などを非常に好きでいながらやらないとい
うようなことからだったろう。私はそうした遊び事は何
でも好きだけれど、あまり真剣に身を入れて、またそう
しなければ満足出来ないので、遊びが遊びでなしに重荷
になってしまいうのでみんなやめてしまったのだという意
味のことをいった。

安倍とிட்டた時のことであつたか、左手の壁に朦朧と
した小さな達摩か何かの画がかけてあつたことがあつ
た。私が珍しい画だとか変な画だとか思いながら見

上げていた時に、安倍がそれは先生の画だといってどう思うときいた。それまでその画の巧拙をさえきめるのに迷っていた私は先生のとときいて急に安心して、「暗い処だからいくらかよく見える。」と答えた。先生はあまり異存がありそうもない様子で、「冗談いっちゃいけないよ。」といった。

「銀の匙」の出た次の年の夏私は叡山でその後篇……つむじまがり……を書きあげて先生のところへ送った。私は帰京してからそれに対する先生の手紙を受取った。それには私の原稿をほめたうえに、どうかいう訳で尊敬

するとというようなことさえ書いてあった。もともと「銀の匙」と同じようなものだから先生の気に入らないことはないとは思っていたけれど、自分にとっては「銀の匙」よりも全体として一層気に入らないものであったので、先生のこの「銀の匙」の時よりも寧ろ深くなったかのように見える賞讃は私にとって反^{かえ}って案外なものであった。私は私の作物に対する先生と私の態度がどこかであべこべになっていることに気がついた。私の原稿は再び先生に御迷惑をかけて朝日へ掲載されることになった。

安倍といった時であった。胃病の話から私が自分の経

験談として胃が悪くなると疝癪かんしゃくが起るし、疝癪が起ると胃が悪くなる。そんな時自分は重曹を少し呑むといいあんばいに酸が中和して（？）直ってしまうという話をしたら、先生は己のことをいうなというような笑い方をしてきいていたが、自分は少しひどい時にそんなことをすると胃囊の中に戦が起って、とてもたまらないというようなことをいった。この時であったか安倍が何かの礼として或処から三円受取ったという話が出た。私は三円あれば二十日間たべられるといった。先生は途方もないことをいうと聞いたように、「たべられるもんか。」と

というようなことをいった。安倍はそばから「でも中はそれですべてるんですよ。」というようなことをいった。

私は先生に納得の出来るように私の暮し方のあらましを話した。それから先生は或処で講演をしたらお礼だといって十円包んできたという話をして、その講演の中で個性を尊重しなければいけないということについて私の「銀の匙」の後篇の或部分を例にひいたといたので「じやその十円は私の方へ下さい。」といたら先生は「一寸例にひいたばかりだよ。十円はやらないよ。五十銭位ならやる。」と行って笑った。そしてあとから「五十銭

で幾日たべられるかね。」とつけ加えた。何かの話から私が自分のことを「これでも中々愛想のいいこともあるんです。」といったら先生は意外だというような顔をした。先生はこんな点でよほど私を知らないところがあつた。知るほどの機会もなかったのだけれど。先生が私が全然孤独……世間と没交渉といったかもしれない……でいられることについて寧ろ滑稽を感ずる位だといったのもこの時であつたらうか。私はそれをきいてそうだ、先生にはとても私のような孤独は守れないと思うと同時に、先生は私が孤独を愛しました事実孤独である半面ばかり

りをしってそれとは全然反対に一方甚だしく孤独に遠はなはざかり、また事実誰よりも孤独でない半面のあることをしらないのだと思った。やはりこの時のことであつたろうか。先生は私が自分のためにまた二三の人に見せる為に筆をとるといふようなことをいつたことを思い出して、「見せるつて一体誰に見せるんだね。」といつて私が見せそうだと思ふ者の名をあげたが、當つていなかつたので、「じや安倍かね。」といつた。私は傍に坐つてる安倍を見ながら、「安倍なんぞ見せて頂けないんです。」といつた。安倍も私の言葉に裏書をした。先生は愈いよいよ不

可解らしい顔をして「じゃあ誰かね。」といった。私が「眼識はなくとも私にとって大切な人に見せます。」といたら先生はにやりと笑った。

いつであったか「銀の匙」の話が出た時に先生は後篇の方が文章の彫琢が少いだけいい、前篇のように彫琢に苦勞する必要がないというような意味のことをいった。

私は後篇に彫琢が少いのは内容が彫琢を要する場合が少いからであろうという意味のことを答えた。私のいおうとしたのはこうであった。彫琢の多少はそのままでは必ずしも価値に関係することではない。前篇には彫琢を必要

とし、またゆるすような場合が多く後篇は之に反していただけのことである。そして私としては寧ろ前篇の方が書きがいもあったし好きでもある。なぜといえれば前篇の方が全体としてより詩的であるから。私はいつか先生に日本語、ことに現代の日本語では殆んど不可能である長詩を断念して散文に筆をとるようになったのはよいことであつた。私は最初それに屈辱をさえ感じたけれど。そして本来私に最も適當した形は結局やはり詩であるけれども。という意味のことを話しかけたことがあつた。先生はまた子供の時のことを書いたものといえばとむぶら

うんやばつどぼういがあるが書いてある方面がちがう。谷崎氏の「少年」はああいうもので「銀の匙」とは少しがちがうし、「銀の匙」のようなものは見たことがないというようにことをいった。先生は綺麗だといった。細かい描写ということをいった。また独創があるということもいった。私は独創という言葉をきいて大学以来だなと思った。先生はあれほど彫琢が施してあって、しかも真実を傷けないのが不思議だという意味のことをいった。私は真実の為の彫琢が真実を傷けないとて不思議はないと思った。誰とかが「銀の匙」をちっとも面白くな

いといったという話から、先生は面白がらないらしい人たちの名前をあげて、誰それには一つの水蜜を二人で食ったというようなことしか面白くないのだというようなことをいった。また誰それにはちつとああいうものを読ましてやるがいいなぞといった。ある人の面白がるものを他の人が面白がらないということがよほど不都合なことででもあるかのように。先生はまた「阿部にも別わからない。」といつてそこにいた安倍に向つて、「君にも別わからないだろう。」というようにことをいった。私は先生が思いちがいをしてると思った。安倍は阿部も自分も興味

をもたなかったことはないという意味のことをいって、私にそういう風に予想しなかったかと尋ねたから私は肯定的に答えた。先生は一寸案外な様子で安倍に向って、

「君達には人生とか何とかいわなくちやいけないんじゃないのかね。ああいう呑気な、問題のない……いや問題はああるが……」というようにことをいった。私はそうだが、問題がちがうのだと思った。先生は「銀の匙」の中に出てくる私の自然に対する感情をとても自分には分らない、こしらえものかと思う位だというようにことをいった。それから滝のある川のところの叙景は潤色してある

のかと私にきいたから私は写生だといった。先生は写生とは思えないというのを安倍が昔はああだったんでしようという意味のことをいったら、先生は「冗談いっちゃいけない。あすこはもとから僕の縄張内なんだ。」というようなことをいった。先生はそこをよく知っているのである。私はなるほど今の私が見るならばやはり写生とは思えないが、その当時私があったような子供の眼には実際ああいう風に見えたのだといおうとしたら、安倍が先に同じ様なことをいだったので、私は黙っていた。「銀の匙」が出た時分のこと先生はその縁日のことを書いた

ところに、あまりくどく同じ様なことがくり返してある
ということを非難した。私はよくも覚えていなかったた
めか、そういうことがあまり問題にならなかつたために
なにかで、唯きき流しにしておいた。その後先生はまた
そのことを注意した。私はまたきき流しておいた。それ
からある時ふと思い出してそこを読みかえしてみた。そ
して先生の非難が当たっていると思った。先生は私がいつ
もきき流しにするので、私がまだ気がつかずにいると思
ったのか、この時もまたそのことをいい出そうとした。
私は先生が二言三言いいかけた時に「あ、あれは別^{わか}りま

した。」といった。先生はすぐに「あ、そうか。」とい
つてその話をやめてしまった。こんなところが大変よか
った。

その次に私が一人で行った時に先生は私のみなりをじ
ろじろ見て、「五円で食べてる人のようじゃないね。」
といった。私はこの前の時私の食料は一ヶ月五円あれば
足りるということを話したのである。そしてこの日私は
ちやんと着物を着かえて行ったのだ。先生はよく人のみ
なりに目をつける。そういう意味のことをいった私の言
葉に対して先生は私の友人に「中だつてよく見る。」と

いったそうだ。先生はこの前話した私の暮し方によほど驚いたとみえて、この日もまたその話をし出して私にもう一度くり返させた。そして私が冬台所へむしろ蓆をしいて精進料理で冷飯を食べるのは身体が冷えていけないというようなことをいった時に、先生は手まねをしながら冷飯には熱い湯をかけて一旦流してからまた湯をかけてたべるといいなぞと、私が何にも知らない子供でもあるかのように教えた。先生は私の現にやっている甚しい簡易生活、不摂生にちかい粗食、しかもそれが私自身の経験したもののうちの最悪の生活ではないということを引き

いた時に先生は驚くというよりは寧ろあきれた。そしてそれは私が最も閑静な住居を望むために寺院を撰んだこと、寺院の掟をみださない為にはそういう生活に甘んじねばならぬこと、そして自分がかたく掟を守つてるといふところにも愉快があるといふことをいっただ時に、先生はそれはそうだろうけれどよした方がいいといふようなことをいっただ。先生は私が身体を悪くしはしないかと懸念するらしかった。また実際悪くしたかもしれないけれど。私は先生にそうはいったものの、私の望むような静な住居はついに得られなかった。人間のいるところに喧

噪はあり醜悪はある。私のこの肉の鼓つづみは人に触れ物に
触れて醜く喧しく音を出さずにはいない。私の意味する
ような静な住居が私に得られるならば、私は十指をすて
ることをも厭わないということをして先生は知らなかったで
あろう。

いつのことか先生は私の友人に「僕も変人だけれど中
は随分変人だね。」といったということ、また中のよう
なむきなものは自殺でもしやしないかという気がすると
いうような意味のことをいっていったということをしき
た。先生の眼に映った私は如何にもそうであったにちが

いない。そしてそれも確に正真正銘の私である。けれどもももし先生がもつと十分に私を知ったならば、恐らくもう少し違っていたいい方をしたであろうと思う。

安倍と聞いた時のことである。私は先生の前へ坐ると間もなく不注意と無性から一寸した無作法をやった。そしてあつと思つて先生の顔を見たら先生は下を向いて少し嫌な顔をしていた。私はしまったと思つた。私は同じことをもう一度行儀よくやり直してみた。そして先生を見たら先生は平気な顔をしていた。私はこうすればいいのだなと思つた。そうしたら間もなく安倍が私と同じよ

うな無作法をやった。先生はまた一寸嫌な顔をした。話してるうちにまた安倍が同じことをやった。私がはつとして先生を見たら先生はじつと不快をこらえるようにして少し赤い顔をしていた。そしてよそ事のようにそれとなく安倍に気をつけさせるようなことをいった。安倍は気がつかずにまたくり返した。先生はとうとう疝癢を起して「僕はそれが嫌でしょうがないんだがやめられないかね。」といった。私がはじめて見た怖い顔であった。それから葡萄酒が出た。先生は人がくれたのだといった。罎は多分はじめ盆にのって出なかった。それで盆のくる

まで何かが間に合せに盆の代りをした。安倍が酒をついでからその上へおかず^にじかに敷物の上へおいた。先生は不機嫌な顔をして「その上へおいてくれたまい。」と
いった。多分私が自分の洋盞へついで時に盆がもってこられた。綺麗な盆であった。私は半分は念の為に半分は意地悪に、「この上へおいてもよござんすか。」といいながら盆の上に罎をささげるようにしていた。先生はさつきからの不機嫌を取消そうとするかのよう^にに殊更^{ことさら}和げた調子で、「ああ。いいいい。」といった。私はなんだか先生が可愛かった。先生も私たちも一二杯呑んで話し

てるうちに先生は気がついて私に、「君は呑むんだったね。自分でついで呑みたまいい。」といった。前から度々酒はやめましたといつてあるのだし少し滑稽だなと思いついながらも、久しぶりで甘いので話しながらついでには呑みついでは呑みするうちに、八分目ほどあつた葡萄酒を大分へらしてしまった。私はもう度胸をすえて、「みんな呑んでもよござんすか。」といったら、「いいともいいとも。」といった。それから話してる間に先生は酔ったかしらとか酔ったなとかいふ顔つきで罎と私の顔を見くらべた。私はとうとう罎をあけてしまった。……

しまいには先生は今迄の不機嫌やら何かをうめ合せるほどに快活に話した。

私が先生と言葉を交えた最後の日、それはなんでも寒い時であったから、先生の歿くなった前の年の冬から翌年の春へかけての間のことであったろう。私は久しぶりでしかも珍しく木曜の面会日の晩に一人で行った。私は用事のない時には随分思いきって御無沙汰をする方で、それに数えるほどしかない私の訪問のうちには先生の病気のために玄関から帰ったことも多かったので、半年以上も先生と顔を合さないことは珍しくはなかった。その

私にとって最後の晩私が例の客間へ通されて挨拶した時に先生はいつになく……恐らくははじめてかもしれない……機嫌のいい微笑をして挨拶を返した。私はそれを「勉強して面会日に来たな。」という顔だと見た。私は多数ことに知らない人の集ってる席でいつもするように沈黙を守り勝ちであった。先生は私に何か話のきっかけを与えようとするように、自分が本を買う買わないの話をしていたところから私に向って、「君の買おうっていった本はいくらとかいったね。」といった。私は先生にとってそんなことはどうでもいいのだとはしりつつも、や

はり調子をつけるために私のほしいと思う部分だけで三百何十円、全部なら千円程のものだというようなことを答えた。それから志賀氏の作物の話が出た時に私が「留女」の中の何かが大変面白かったことを覚えているといったら、先生は行き方が私とはまるでちがってるといような理由で一寸解せぬらしい様子であった。私は自分とちがったからとて面白くないという訳はないといおうとして、何かの都合でいわなかった。それから武者小路氏のもの書きかたが気に入らないという意味のことをいったら、先生は「そりやそうだろう。中のは絹漉し豆きぬご

腐だし、一方は豆腐でさえあれば石灰がはいっててもかまわないというんだから。」というようなことをいった。べるもつととか何か出て皆が一杯宛呑ずつんだ。先生は黙り込んでしまった。私は一寸気にかけていた。一人が「お疲れになったんですか。」ときいた。先生は酔ったのであった。私は一杯の酒に酔う先生が可愛かった。

その次にまた久々で先生のところへ行つた時に、先生は一両日前から少し不快というので面会が出来なかつた。それから幾日もたたないうちに誰からであつたか、先生が重態ということをきいて御見舞に行つたが、勿論

面会は出来なかった。私はさし迫っていた旅行をのぼした。その旅行に立つ筈であった日に小宮から危篤の報を得た。私は先生の息のある間に行つた最後のものであった。先生はかすかに絶え絶えに息の残りをついていた。

私は自分の性格からして自分の望むほど先生と親しむことが出来なかった。寧ろ甚だ疎遠であつた。私はまた先生の周圍に、また作物の周圍にまま見かけるような偶像崇拜者になることも出来なかった。唯先生は人間嫌いな私にとって最も好きな部類に属する人間の一人であつた。そして先生は私の人間とまではいわずとも、私の創

作の態度、作物そのものに対して最も同情あり厚意ある
人の一人であつた。

(大正六年六月)

日本文学電子図書館

漱石先生と私

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 29

筑摩書房

昭和46年6月25日 初版第1刷発行

日本文学電子図書館